

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑦

野生動物と人間の共生
をテーマに、岩手県立博
物館第六十一回企画展
「野生動物と生きる」岩
手のシカとクマ」を二
〇〇九年十月から約二カ
月間にわたり県立博物館
で開催した。ツキノワグ
マ、ニホンシカ、オオカ
ミのはく製など百六十四
点を展示した。

五葉山麓をパトロール
中に瀕死の野生子シカと
出会った伊藤悦次さん
が、二十年間ともに暮ら
し、伊藤さんの元で一生
を終えた「ピー太」の残
した角も「共存」の証と
して展示させていただい
た。

この企画展に当たって
は、元東海新報編集長・
鈴木周二氏、旧知の中嶋
敬治氏、休石昭一・瑠子
夫妻、紺野一郎氏、紺野
茂忠氏、岩井岸雄氏はじ
め多くの方々にお世話に
なった。気仙地方からの
借用展示物が多く、「気
仙地方展」の観を呈し
た。

私は鳥類を専門分野と
するがシカやクマについ
てはまったくの門外漢で
あり、その生態や生育環
境を知るため親友の佐藤
嘉宏氏に懇願し、五葉山
と大湊山を案内していただ
いた。二十五年前にも
岩手県教職員組合環境問
題分科会で佐藤氏とともに
に赤坂峠周辺を歩いた。
中嶋敬治氏からブナの幹
に大きなキツツキ科鳥類
の採餌痕のあることを教
えられたこともあった。
北上山地初のクマゲ
ラが発見できるのではと
内心期待して出かけたの
だった。曇石からけもの
道に入り日没まで張り込
みをしたが徒勞に終わっ
た。

北上山地の時代

盛岡市桜台 藤井 忠志

るごと詰め込まれてい
る。いわば、北上山地は
「日本の宝」と呼んでも
過言ではない。

私はあらためて、「野
生動物と人間の共存」に
ついて考えている。企画
展の準備段階で出会った
気仙の人たちのまじめ
さ、誠実さ、温かさのな
かに「共存・共生」を実
践し、地域に生き、暮ら
してきた確かな歩みの系
譜を感じたからである。

人々の歩みの座標軸が
定まらない今日の時代だ
からこそ、歴史に学ぶこ
とが大切だ。歴史は単な
る時間の経過を意味する
ものでなく、人々の創意
や工夫、日々の営為の集
積の上に築かれている。
現代に生きる私たちが野
生動物と共存する意味と
方策を探ることを試みた
企画展は、そのことを私
自身にも教えてくれてい
る。

「これからは、北上山
地の時代である」。今、私
たちが忘れかけ、失いか
けていることを「共存・
共生」の歴史を通して捉
え直してみたい。動物、
植物、そして人間、その
存在の意味と生きること
の尊さをである。

五葉山やこの山に繋がる
人々の姿にそんな思い
が深まっていく。

【執筆プロファイ
ル】昭和三十年、秋田県
大館市生まれ。岩手県内
公立中学校教諭として二
十年勤務後、岩手県立博
物館へ。本州産クマゲラ
研究会代表、縄文柴大研
究センター理事、日本鳥
学会・野生生物保護学
会・極東鳥類研究会の各
会員。現・岩手県立博物
館学芸第三課長

ニホン
シカ
と
クマ

初めて入る五葉山で驚
かされたのは、これまで
私が踏査してきた奥羽山
脈とは異なり、ブナ、ミ

気仙地方をはじめとする
北上山地には、地質学上
はもちろんのこと動物、
植物を取り巻く自然がま



ニホンジカの雄。三陸町大湊山にて
(平成20年10月18日撮影)